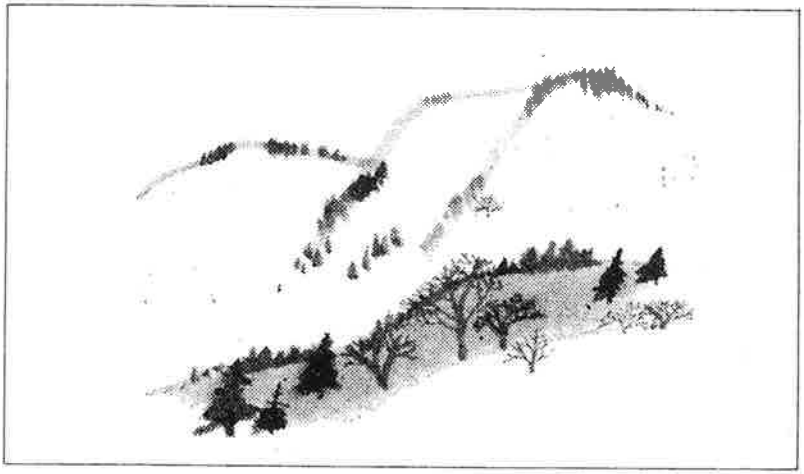

明治の佐伯三青年（十三）

――龍溪・鳴鶴・鶴谷――

御手洗　一　而
（会員・埼玉県川越市）

矢野報知入り

三島県令の摘発事件は、報知の藤田と嗜の長谷川義孝両氏が罰せられたが、長谷川は士族であったため自宅禁錮ですみ、平民の藤田は縄付で監獄へ送られた。事件の内容とは別に、この頃では士族と平民の差別待遇が巷の噂に上った。内容は明治新聞綺談によると、

「三島県令の秘事が、どんなことかというと、福島の電報掲載で、圧政知事三島通庸が、管内の茶屋で遊興して娼妓を揚げ、一夜の春を買ったが、玉代五十銭でよいところを、知事の顔で纏頭（花代）十円を遣ったという。屁にもならない通信であった」

とあるように、現在で考えると馬鹿馬鹿しくお粗末で話にならない。藤田が半信半疑であったのは無理もないが、この一事をもってしても、政府の狼狽（ろうばい）と言論弾圧の方針がよく分かる。だが、藤田にとって監獄送りは予想外であった。当時の自宅禁錮は実に寛大で、門前に羅卒が立番

するでもなく、時々役人が見廻りにくるぐらいで、酒を飲んだり放歌高吟したり、夜分には北里（はくり）へ出かける者もあったと伝えられている。

入獄させられた藤田は、獄内で痛切に人権問題を考えるようになった。

主人のいなくなった二等煉瓦屋は、豊吉が一切のきりもりをした。書生達の食事や、体の余り強くない藤田に、差入れの心配まで気を配った。藤田にとって、豊吉はもうなくてはならない人になっていた。豊吉は藤田の心中を察した。さぞ口惜しかろう。入獄が口惜しいのではない。士族の差別待遇が無念にちがいないと、そっと涙ぐむ時があった。藤田が権力におもねたり、自説を曲げたりする人でないことは、豊吉が一番よく知っていた。

明治九年の正月は、藤田家にとって散散な年の始まりであった。獄中の藤田は、社説に空白の出来ることを恐れていた。それが主筆としての責任でもあったが、犬養の知らせは、その心配を緩和してくれた。

兄貴分の矢野が原稿を送ってくれたからである。

一月七日掲載、「社説　政略篇第一　社会の焦点」である。この小論が矢野の新聞紙上に顔を出す最初であるが、学究一筋を目標に、中央を去った矢野の研究成果ともいえる一文である。藤田が頼りになる兄貴と思ったのは勿論であるが、本奔な藤田に、こんな用意周到な一面のあることが、社長や栗本に信用される所以でもあった。徳島にいた矢野が、時代の変化とともに、自個の研讃を引っさげて中央進出を試みるのはこの頃である。

獄中の厳寒をしのいで出獄した藤田は、気分一新を図るため、再度転居することにした。当時の地名でいえば、浜町三丁目四番地ワ六号である。京橋よりもずっと報知社に近くなった。家も広く構え、藤田には豊吉を迎え入れる下心があったのかもしれない。

藤田が釈放されて間もなく、前に書いた成島・末広の事件は、今度は二度目とあって実刑を申し渡された。当日は風雪が激しく、二人は簑笠を渡されて入獄した。筆禍事件はますます度を加えていた。

藤田は、入獄中の空白や投書の減少を考慮して、ある日、犬養に一つの提案をした。

「報知に寄稿しながら慶応義塾に入塾してはどうか。

今からは英学の必要な時がくるぞ」

犬養にとっては、願ったりかなったりの提案ではあったが、寄稿ぐらいで果たして学資の続くものかどうか不安であった。

五尺たらずの藤田と、これも小男の犬養が、石にかじりついても猛進する進取の気性は、どちらも似たところがある。犬養は早速この申し入れを受け入れて、報知の投稿欄に論説を寄稿することにした。

二月の月末に、矢野から次の原稿が届いた。藤田が入獄中に助けられた論説の結篇であった。「政略篇第二・第三　貧富等均ヲ論ズ」で、三月二、三、四日と掲載された。

出獄以来、気の進まぬ時のこれらの寄稿は、藤田にとって、全く天の恵みに思われ一息入れることが出来た。

それよりも藤田が喜んだのは、矢野が東京に帰ってくるという知らせであった。そろそろ帰京の時機ではあったが、退官した父が年をとり、矢野家が再び賑やかになるのが自分のことのように嬉しかった。

犬養は、藤田の勧めに従って、三月六日慶応義塾に入塾した。日曜日の休みを利用して寄稿する原稿代が、一回にして五、六十銭、一ヶ月大体四、五円になる見通しがついたからである。

犬養が入塾してある夜、藤田は犬養を自室に呼んだ。

「おい犬養。入塾の記念に入魂の贈物をやろう」

藤田はこう言って、傍の豊吉に合図した。

「豊吉。あれを出してやれ。名誉ある羽織を」

豊吉は、暫くして、大事そうに一枚の羽織を運んできた。犬養はきょとんとしていた。

「これはなあ、犬養、俺が貧乏書生の時に、矢野さんから譲り受けたものだ」

犬養が眼にしたのは、丁寧に繕われた黒木綿の一枚の羽織であった。

「この羽織は寒さもしのいだが、人の情も知っている。それにもまして、塾の英学の魂がしみこんでいる。必ず苦しい時の励みになる。これを贈ろう」

藤田は、一枚の羽織にまつわる由来を話して犬養に手渡した。

この羽織が、矢野から藤田、藤田から犬養と受けつがれた、世にいう出世三代羽織である。

犬養が塾生中羽織姿で通したことは有名である。犬養は、この頃の手紙で、生活費の不足分は藤田に援助をうけながら、みっちり三年間英学を勉強して、百円の月給取りになると郷里に書き送っている。

藤田は犬養の才能を惜しみ、あえて自分の経験した苦学を犬養に強いたが、一方では報知社への寄稿は役に立った。出獄後の藤田は気のすすまぬ日が多かった。思うことも書けず、巧みに法の盲点をつく器用さもなく、その表現はあいまいで本意ではなかった。

その後も政府の弾圧は続くが、各社も負けてはいなかった。過激な「評論新聞」や「采風新聞」の編集長は、先を競うようにして入獄した。そして、藤田の忠告にもかかわらず、同僚の箕浦も又犠牲者となった。

矢野はこんな時に帰京してきた。

分校の後任は城泉太郎に託し、一年三ヶ月ぶりの帰京であった。矢野は大阪・徳島と塾の分校長を歴任し、名目は本塾の教師であったが、師の福澤はあえて矢野に報知入りを勧めた。箕浦の禁獄という不幸もあったが、報知は福澤にとっても言論界の一橋頭堡であった。それに、兄弟のような矢野・藤田のコンビはうってつけで、向こう見ずの藤田に深慮の矢野の組み合わせは、充分に福澤や栗本の意向にそうものであった。

矢野の後日談によると、「報知の遊軍・藤田の遊軍」として寄稿した前記の論説が、毛色の変った記事として、読者に評判のよかったのも一つの自信につながったが、その評価が矢野の目算でもあった。新聞も読まず雑誌も見ずと決意して研鑽した成果を、新聞という公の機関で発表する機会であり、学究の成果は新聞条例も讒謗律も関係なかった。矢野の発表は、政府が研究中の諸政策を、西洋の文献から紹介論及することである。それがひいては大衆の啓発になり、藤田を援助することになる。こう考えた矢野は、報知入りを決意した。

矢野との再会を喜んだ藤田は、入獄中の寄稿の礼ももどかしく、新聞界の現況をかいつまんで説明した。それから犬養を紹介した。

「矢野さん。貧富均等論は有難かった。四民平等も名ばかりで、縄付きと無縄の差があるが、あれで胸の中

がすっとした」
藤田は、士族と平民の差別がよほど腹立たしく、つい口に出たが、矢野の眼はすでに新聞に向けられていた。
「その通り。一国の盛衰は政府ではなくて人民の力にある。しかし、憲法を始めその具体的な諸制度手続きは、政府内でも誰もわかっていないんだよ。スィヴル・ロー、クリミヌル・ロー然り、ローカルタクゼーションなどは、学者さえも誰一人としてこれを知らない。民選議院も急がねばならぬが、政府にも教えてやらねばならぬ。その点では、新聞ほど利用価値のあるものはあるまい」
茶道の先生のような端然とした矢野の口から、英語がぽんぽんととび出す。傍にいた犬養は、矢野の話を聞きながら英学修業の必要性を痛切に感じ、政府にも教えてやるのかと眼を丸くしていた。
「犬養君は小田県の出身といったな。今からの日本はやることが一杯あるぞ」
犬養は突然声をかけられて緊張していた。
「全くでございます」
犬養は答えて訳もなく頭を下げていた。

藤田は、今更ながら先輩の猛勉ぶりに驚嘆し、頭の下がる思いだった。
「ところで茂吉。俺も報知入りを決めたよ。福澤さんに勧められたが、少し考えるところがある。雑用のすみ次第、来月からでも社に出ることにする。栗本さんにも宜敷く伝えておいてくれ」
「そりゃ有難い」
藤田は矢野の報知入りを聞いて眼を輝かせたが、藤田にとっては千人力の味方であった。

会誌紹介

萬葉

弥生町歴史と文化を語る会は会誌「萬葉」第一号を十一月に発行した。
昭和四十九年より今日までの事業概要・研修記・所感・短歌等をのせている。活発な活動を続けている同会の会誌として、今後ますます充実したものになるであろう。